

	青少年赤十字 賛助 ひろしま	青少年赤十字賛助奉仕団信条
第31号 2026.3		1. 青少年赤十字の充実発展に協力奉仕する。 1. 赤十字思想の普及啓発に努め、平和な社会の実現に寄与する。 1. 志を同じくする人々と手を取りあい、研鑽に努める。
発行 事務局	広島県青少年赤十字賛助奉仕団 〒730-0052 広島市中区千田町2-5-64 日本赤十字社広島県支部 TEL (082) 545-5011	

青少年赤十字の活躍に寄せて 広島県教育委員会教育長

篠田 智志



日本赤十字社におかれましては、災害救護、赤十字救急法の普及、ボランティアの育成、血液事業の推進、国際活動への参加など、人間のいのちと健康、尊厳を守るためのさまざまな活動に取り組み、社会活動を支えていただいていることに、心から敬意と感謝の意を表します。

また、広島県青少年赤十字賛助奉仕団におかれましては、加盟校でのイトスギの植樹や防災教育資料のホームページ化等、平素から本県教育の充実に貢献いただいておりますことに心から感謝を申し上げます。

さて、青少年赤十字では、長年にわたり、児童・生徒が「赤十字」の精神に基づき、世界の平和と人類の福祉に貢献できるよう、日常生活での実践活動を通じて、いのちと健康を大切に、地域社会や世界のために奉仕し、世界の人びととの友好親善の精神を育成することを目的として、さまざまな活動を学校教育の中で展開されておられます。

その中で、加盟校におかれましては、人間尊重の精神や社会の一員としての責任と自覚を養い、世界の平和の実現を目指し、世界の仲間と仲良く助け合う力の育成に御尽力いただいております。加盟校の児童生徒は、広島県赤十字大会での実践発表にもあつたように、日常的にボランティア活動や募金活動、国際交流等さまざまな活動に工夫して取り組みながら、自ら課題に「気づき」、課題解決の道筋を主体的に「考え」、解

決に向けて仲間と協力して「実行する」ことを学んでいるところです。

このことは、県教育委員会において推進しております、生きて働く知識・技能の習得と同時に、自ら課題を発見し、主体的に考え、他者と協働しながら解決していく力を育むことを目指した「学びの変革」と軌を一にするものであり、これからも、「気づき、考え、行動する」力を生活の中でも生かしながら、生涯にわたり個性と能力を伸ばし、多様な他者と共生していくことの大切さを広げていただきたいと思います。

最後になりますが、青少年赤十字の更なる発展と加盟校の広がりに向け、皆様の御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

広島県支部の新たな活動

日本赤十字社広島県支部事務局長

坂井 浩明



賛助奉仕団の皆様には、平素より青少年赤十字の普及・発展並びに赤十字事業へのご理解とご協力を賜り、厚くお礼を申し上げます。

令和6年は能登半島地震、令和7年にはトカラ列島近海を震源とする地震災害、伊豆諸島を襲った台風22号及び23号による大雨・暴風被害など、大規模な災害が頻発しています。

このような自然災害に対応するため、平素から赤十字は救急法の講習や防災セミナーの開催など積極的に取り組んでいます。

また、地球規模で進んでいる温暖化という気候変動は、水害や旱魃、山火事などの自然災害を頻発化、激甚化させることによって、人間のいのちと健康、尊厳を脅かす人道上の危機をもたらし、世界中においてその状況は深刻化しています。

日本赤十字社は、この課題に正面から取り組む必要があると考え、令和6年12月に気候変動に対するアクション・プランを定めました。

広島県支部では、活動の第一歩として、森林活動を通じて自然の大切さや防災の意識を高めていただくため、ボランティアによる植樹活動を始めました。

さらに、世界では気候変動による人道上の危機に加え、紛争による人道上の危機も広がっています。このような世界の状況の中で、国際的な視野をもって広く物事を見聞きし、課題発見能力や解決方法を見出す力を養うことを目的に、広島県支部では今年度から新たに「カンボジア赤十字社との国際交流事業」を高校生を対象として始めております。令和7年12月にはカンボジアで10名の高校生が8日間のスタディーツアーに参加し、令和8年はカンボジアの高校生を広島で受け入れる予定です。

当支部では、今後とも、青少年の育成に積極的に取り組んで参りたいと考えておりますので、賛助奉仕団の皆様におかれましても、青少年育成における豊富な経験や知識を是非とも發揮していただくとともに、青少年赤十字の更なる発展に向け、引き続き、ご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

「賛助ひろしま」第31号によせて

広島県青少年赤十字指導者協議会 会長
広島市立国泰寺中学校 校長 長屋吉輝



日頃より青少年赤十字の活動にご尽力いただいている皆様に、心より感謝申し上げます。青少年赤十字は

第一次世界大戦下、子どもたちが赤十字を通じて戦地へカードや手紙を届けたことを契機に世界へ広がり、わが国では大正11年に誕生しました。令和7年度を迎えた今も、その精神は受け継がれ、子どもたちの成長を支える大切な基盤となっています。

広島県では、創設百周年記念事業「百万羽おりづるプロジェクト」が大きな成果を上げ、児童生徒が折った折り鶴が世界記録として認定され、平和への願いと青少年赤十字の精神を広く発信する機会となりました。また、賛助奉仕団の皆様には、本県の青少年赤十字の普及・発展への日頃のご尽力に加え、防災教育に重点を置いた教材開発など、子どもたちの「いのちを守る力」を育む取組に深く敬意を表します。

本校においても、「気づき、考え、実行する」態度目標を軸に、人道の精神を体験的に学ぶ活動を推進しており、生徒会活動を中心に地域や社会とのつながりの中で実践する姿に、その価値を実感しております。学校教育が育んできた「生きる力」は、青少年赤十字の実践目標や態度目標と深く重なるものです。

令和7年度も、人道の精神のもと、子どもたち一人ひとりが周囲を思いやり、自ら行動できる人材として成長できるよう、より充実した活動の推進に努めてま

いります。今後ともご指導ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

学習指導要領改訂を見据えて

〈さらなる青少年赤十字活動の広がりを〉
広島県青少年赤十字賛助奉仕団 委員長
山中 章敬



広島県青少年赤十字賛助奉仕団は、県内における青少年赤十字のさらなる活性化を目指し、多方面からの青少年赤十字加盟

校支援に尽力しております。このたび、その一環としてホームページを開設いたしました。本サイトを通じて県内の活動が一層活性化するとともに、本賛助奉仕団の理念にご賛同いただき、志を共にする仲間が一人でも増えることを心より願っております。

現在、教育界では次期学習指導要領改訂を見据えた議論が活発化しており、授業時間の見直しや探究的な学習の拡充などが検討されています。青少年赤十字が掲げる「気づき・考え・実行する」という態度目標は、共感性や問題解決力、自己肯定感といった非認知能力の育成を重視するものです。これは文部科学省が推進する「主体的・対話的で深い学び」と軌を一にしております。予測困難な社会を生き抜く力の育成に大きく寄与します。私たちの活動は、まさにこうした教育改革を先取りする形で、すでに多くの加盟校の現場に根付いていると言えるでしょう。

とりわけ現在検討されている「授業時間の短縮と学校裁量時間の創出」は重要な転換点です。小学校で45

分を40分に、中学校で50分を45分に短縮して生み出される時間は、各校の裁量に委ねられます。カリキュラム設計における教員の負担増も懸念されますが、見方を変えれば、この時間を防災教育や地域課題の探究、ボランティア活動、国際理解などに活用できる絶好の機会でもあります。これは、赤十字の精神に基づく活動を学校教育全体へ浸透させる大きな可能性を秘めています。

青少年赤十字の活動は普遍的な価値を持つものです。来るべき教育改革を契機として、その活動がさらに発展するよう、賛助奉仕団としても一層の支援に努めてまいります。

広島県青少年赤十字賛助奉仕団 ホームページ開設のお知らせ

開設の目的

広島県青少年赤十字賛助奉仕団は、活動内容をより多くの方に知っていただき、赤十字精神の普及と青少年赤十字の発展に寄与することを願ひホームページを開設いたしました。アドレスは次のとおりです。

URL <https://hiroshima-jicsvc.org>

または、Googleより

「広島県青少年赤十字賛助奉仕団」

左は、「広島県防災教育」の目次の一部

主なコンテンツのご紹介

1 広島県防災教育 Ver.1.14

広島県特有の災害リスク例えば地震、津波、豪雨などに関する知識から、実践的な防災行動、日頃からの備えを強化するため、広島県の青少年赤十字加盟校向けの防災教育に特化した教材や指導資料を提供します。学校や地域での防災教育活動に役立つ、実践的な内容になるよう作成しました。

バージョン1.14という表記は、最新の研究成果や過去の災害からの教訓など定期的かつ継続的に反映する更新の形態を示しています。

2 学校教育と青少年赤十字

青少年赤十字の活動は、激動の時代を生き抜くために必要な人道的価値観と「生きる力」（21世紀型スキル）をいかに育成するかを示した、包括的に解説する指導者向けテキストです。激動する現代社会において普遍と流行を加味し、社会の課題と学校教育の役割を提示した上で、JRC活動を教育実践の中心に位置づける意義を論じています。学校教育のカリキュラムと密接に連携させ、生徒たちの心身の健全な発達を多角的に支援しています。青少年赤十字が提供するプログラムは、児童・生徒たちが「健康・安全」に関する意識を高め、「奉仕」の精神を通じて他者への共感と思いやりを育み、そして「国際理解・親善」を通じて異

文化を尊重し、地球規模の視野を持つことを促します。具体的には、学校内外でのボランティア活動、清掃活動、献血協力、募金活動、国際交流プログラムへの参加などが挙げられます。児童・生徒たちは自主性、協調性、問題解決能力、そしてリーダーシップといった、社会で活躍するために不可欠な資質を実践的に身につける資料を提供しています。

3 広島県での赤十字の偉人

広島県において赤十字運動の発展に貢献し、その歴史に名を刻んだ偉人たちの功績を紹介しています。これらの人物は、困難な時代において人道主義の精神を体現し、地域社会に多大な影響を与えました。彼らの物語は、青少年赤十字のメンバーだけでなく、広く一般市民にとっても、赤十字活動の崇高な理念とその実践の歴史的背景を理解するための貴重な教材となります。

特に、広島が原爆の悲劇を経験した地であることを踏まえると、戦後の復興期における医療支援、被爆者ケア、そして平和構築への献身的な取り組みは、極めて重要な意味を持ちます。過去の偉人たちが示した勇氣と奉仕の精神は、現代においても私たちに希望を与え、人道支援活動の継続と発展のための大きなインスピレーション源となります。

4 機関誌『賛助ひろしま』バックナンバー

当団体の長年にわたる活動記録をアーカイブしています。第10号（2004年）から最新の第30号（2025年）まで、約20年間の活動の軌跡をPDF形式でご覧いただけます。これは、本県の青少年赤十字および賛助奉仕団の活動内容、教育プログラムの成果、地域社会との連携事例、そして赤十字の理念に関する

理論編

1.広島県の災害の歴史

2.広島県における直近の災害について

3.広島県の災害の特徴

4.広島県の地質と気候

5.ハザードマップの利用

6.今後想定される災害

実践編

7.自分の住んでいる町のシミュレーション

8.避難指定場所・避難経路マップ

9.教材づくり

指導案検討

資料編

A.広島県防災WEB

B.土砂災害ポータルひろしま

C.参考になるサイト

D.災害の映像

特集記事などを、広く社会に伝えるための重要な手段です。過去の機関誌を閲覧することで、読者は本県のJRCおよび賛助奉仕団の活動の歴史的な変遷や、具体的な取り組みを詳細に知ることができます。特に、青少年赤十字のメンバーや学校関係者にとっては、過去の事例や直面した課題から学び、将来の活動計画を立案する上での貴重な資料となることでしょう。また、一般の人にとっては、地域の青少年赤十字や赤十字奉仕団等がどのような社会貢献活動を行っているのかを知る機会となり、赤十字運動への理解と支持を深める上で不可欠な情報源となります。

今後の展開

- ① 既に開発済みの教育資料をアーカイブス化する。
- ② 開発した教材を公開する。
- ③ 他機関が公開している教材をリンクすることにより利用者の利便を図る。

令和7年度広島県赤十字大会

- 1 日時 令和7年10月25日（土） 13時
- 2 会場 広島情報プラザ
- 3 プログラム
 - ア 開会行事
 - イ 青少年赤十字加盟校の活動紹介・発表
 - ウ 奉仕団の活動報告
 - エ 分科会
 - オ 閉会行事

1 加盟校活動報告

(1) 呉市立片山中学校生徒会

「私たちの片山中学校JRC活動の紹介」

呉市立片山中学校は、JRC加盟校として、日々、防災に関する活動やボランティア活動に積極的に取り組んでいます。

今年の7月7日に生徒朝会を活用し、防災への意識を高めるための「防災集会」を行いました。その防災集会の目的は「これまでの防災学習を振り返り、身近に災害を意識し、防災知識をより深いものすること」、「災害時の3つの助け『自助・共助・公助』について改めて学び直し、JRC加盟校の一員として災害時に自ら行動できる実行力を付けること」としました。



防 災 集 会

そして、実際に防災集会で行った内容は大きく分けて3つあります。

1つ目は、日本赤十字社が発行している「災害時の心の働き」のスタンツです。災害時に起こりやすい、「たいしたことじゃない」と自らに言い聞かせ、心の平穏を保とうとする心の働き（平常性バイアス）などについて、生徒会執行部がスタンツを行い、全校生徒に伝えました。



2つ目は、これまでの防災学習の振り返りとして、中学校3年間で学習した防災学習の取り組みについてのプレゼン発表です。呉市防災センターでは、関東大震災の揺れを実際に体験し、揺れ始めると、机の下に逃げ込むのが精一杯で、立つこともしやがむこともできませんでした。そのような揺れの中で、とっさに自分の避難行動を考えることは難しいです。だからこそ、日頃から避難行動を考えるように思いました。

3つ目は、防災宣言の発表と復唱です。執行部で考えた防災宣言を発表し、全校生徒で復唱し、これから生徒一人ひとりが災害を意識して自分の命を守り抜くことを強く決意しました。防災宣言の一部を次に示します。

① 自分の命は自分で守る

② みんなで助け合う

③ 地域の安全は、みんなで守る

その他、片山中学校では、早朝ボランティア清掃も行っています。美しい片山中学校を目指して、普段手の届きにくいところを重点的にきれいにし学校環境を整えたいと考え実行しました。全校生徒に呼びかけると、毎回、50人程度の生徒が参加してくれています。そして、参加してくれた生徒にはボランティア証明書を発行し、参加してくれる度にシールを貼ることで、「笑顔で貢献」というスクールモットーを達成する事ができるよう、工夫しています。

また、学校や地域の行事があるときには、赤十字の募金箱を使って義援金の募金活動を行っています。今年度も多くの善意をいただきました。

このように、片山中学校では、日々様々な活動を行っています。これからも、他のJRC加盟校の取り組みを参考にしながら、JRC加盟校として生徒会執行部を中心に新たな活動を展開していきたいと考えています。

(2)

広島市立広島みらい創生高等学校 「ボランティア部のJRC活動について」

広島市立広島みらい創生高等学校

教諭 松本優衣

広島みらい創生高等学校は、定時制の課程である平日登校コースと、通信制の課程である通信教育コースの2つの課程を有しており、登校する日数や時間帯が生徒によって異なるという特徴があります。そのため、

本校ボランティア部は「できるときに、できることを」というモットーで活動しており、各課程の生徒が可能な範囲で参加したい活動に参加する形式をとっています。また、JRC活動だけでなく、広島市中区社会福祉協議会と連携したボランティア活動も行っており、生徒の興味・関心に合わせて生徒各々のペースで活動できることが部の特徴となっています。その中で、本校が力を入れている活動を2つ紹介させていただきます。

1つ目は、毎年1回、土曜日の午前中に実施している「校内ミニトレセン」です。これは夏のリーダーシップ・トレーニングセンター（以下、トレセン）に向けて赤十字に関する知識や興味・関心を高めること、また部内の生徒同士の交流を深める役割を担っています。



校内ミニトレセンでの包帯法の演習

例年は、講義「赤十字と青少年赤十字」、防災に関するグループワークの2つを行っておりますが、今年度は、広島県赤十字大会の救急法競技大会を見据え、前記2つのプログラムに追加して包帯法に関する講義・

実践も行いました。

この活動を通して、「三角巾を使った包帯の巻き方を知り、いつか役立てたいと思った」や、「普段は関わらないメンバーとコミュニケーションをとることができた」など、活動に参加することが少ない部員からも前向きな感想が集まり、その後の部の活動意欲を高める足掛かりとなりました。

2つ目は、「ちよこつと★ボランティア」（略して「ちよ★ボラ」）で、部員各自が身の周りの小さなニーズに気づいたときに、短時間でできるボランティア活動を自主的に行うというものです。本校は、授業の曜日や時間帯が生徒によって異なるため、生徒による清掃活動の機会が限られています。そのため、「ちよ★ボラ」を利用し、教室の机の整頓や簡単な清掃などを部員が自主的に行っており、「できるときに、できることを」という部のモットーを体现しています。

これら以外にも、献血ボランティア活動や夏のトレセン、広島県赤十字大会など、他校のJRCメンバーとの交流や情報共有を行う活動にも積極的に参加し、本校部員の活動意欲を高めるよう努めています。また、今年度は、文化祭に初めて部として参加しました。この試みは、「文化祭で出し物をしたい」という部員の声から始まり、試行錯誤をしながら実現しました。

今年度は、部の活動を掲示にて紹介するとともに、消臭フラワーを作成するワークショップを行い、用意していた50セットがすべて完売する大盛況となりました。また、ワークショップを行う中で、部活動紹介に関する掲示に目を向けてくださる方もおり、本校の生徒・保護者の方に部の活動を宣伝するよい機会となりました。



消臭フラワーの制作過程

本校は、生徒の課程や時間割が異なるため、コース間の連携や継続的な活動を行うことが難しいという課題があります。一方、その不便さゆえに、部員が自ら活動の幅を広げる方法を提案する姿や、個々の判断で自主的に活動を行う姿が見られるのではないかと考えています。今後の活動においては、「誰かの役に立ちたい」「新たなことに挑戦したい」という部員の意欲的な姿を受け止め、JRC活動のさらなる活性化に努めるとともに、より多くの部員が活動に参加しやすくするための環境整備に努めていきたいと考えています。

(3) 広島なぎさ中・高等学校

「ボランティア部の活動」

校内活動について

① コンタクトケースやベルマークの回収活動

これらの回収活動では学校の各学年フロアに回収ボッ



放課後児童クラブで園児とのお遊びタイム

クスを設けて、回収したコンタクトケース、ベルマークをアイシテイや財団に届け、リサイクルを手伝う活動を行っています。

② 募金活動

年に2、3回ほどユニセフや国内国外の被災者支援などの募金を行っています。呼びかけの準備段階で、世界の貧しい子ども達の現状や被災することの大変さを知り、校内に周知することができました。

③ 小学生放課後児童クラブ(AST)の活動

ASTとは、なぎさ中高校の近くにある「なぎさ公園小学校」の放課後児童クラブのことです。毎週月曜の放課後は小学生の学習のサポート、一緒に遊んだり話し相手になったりする活動を行っています。

校外活動について

① 献血ボランティア

私たちは毎年5月に献血センターで母の日献血のボランティアを行っています。来てくださった方へのお花のプレゼント、献血の呼びかけ、事務作業のお手伝いなどをさせていただきました。

② 茅の輪作り

茅の輪作りは学校の近くにある塩谷神社で行われている無病息災を願う伝統行事であり、地域の方々と一緒に茅の輪の制作をしました。この体験を通して身近な伝統行事の役割を深く考えさせられました。

③ スポGOM甲子園

スポGOM甲子園とは、年に2回決められた地域でゴミ拾いを行い、量や質を競う地球最もやさしいスポーツイベントです。去年の県大会では表彰とはなりませんでしたでしたが20チームの中で4位の成績を残しました。

この体験を通して、海ゴミの大半が陸で捨てられたゴミである事を知り、海ごみも他人事ではなく自分事として考えていく必要があると思いました。

④ 赤い羽根募金

在校生の保護者の方からのお誘いで赤い羽根募金のお手伝いを行いました。募金してくださった方に景品を渡したり、赤い羽根募金についてもっと知ってもらうために子ども向けクイズを出したりなどの活動を行いました。

⑤ 青少年赤十字赤十字トレーニング・センター

トレーニング・センターでは赤十字の態度目標である「気づき・考え・実行する」を常に意識して主体的に行動しました。赤十字についてや、救急法など、たくさん学びを得ながらも他校の生徒たちと絆を深め

ることが出来ました。

⑥ 中国放送(RCC) 高校生連携授業

私たちは今年、テレビ局中国放送からのお誘いで海ごみに関する年間のプロジェクトに参加し、江田島や宮島での海岸清掃を行いました。そして先日、プロジェクトのメインイベントである高校生連携授業に取り組みました。そこでは海ごみに関する講義や謎解き作りなどのアクティビティを受講しました。瀬戸内海のおみ問題や現在取り組まれている活動について学ぶことができ、私たちが今できることは何かを考えるきっかけになりました。



回収したいろいろな海ゴミ

今後の展望

今まで続けてきた活動を途切れさせないよう、今までに学んだことを活動に活かしながら継続的に取り組む、活動人数を増やし、定着させる、地元の人に喜んでもらえる活動を増やすことを目標に活動していきます。

(4) スタディセンターの報告

広島なぎさ高等学校 持丸瑞生

日本赤十字社本社主催の令和6年度 青少年赤十字スタディ・センター(以下、スタセン) (令和7年3月22日から3月26日まで)に参加したので報告します。スタセンは指示のない5日間で、自分にできることは何かを予測しながら目的意識を持って挑む研修でした。主に各県で夏休み実施されたトレセンに参加した生徒の中から県ごとに1人または2人が選ばれ、全国から山梨県山中湖畔に集まりました。

主な日程は次のとおりです。

第1日 開会式とオリエンテーションを行い、5日間共に行動するHRの人たちと顔合わせをして、座学をひとつ受けました。

第2日 主に座学と自主研修を行いました。

第3日 午前中にフィールドワーク、午後に少し座学を受けて自主研修を行いました。

第4日 「今後の活動を考える」時間

第5日 閉会式、解散しました。

次に、研修内容を紹介します。

① 座学

座学では赤十字の基本理念や七原則が青少年赤十字とどのように関連しているのか考察したり、世界が抱えている課題に対し私たちにできることはなにかについてなどの講座を受けました。受け身になるだけでなく、自分の意見や考えを講座の中で確立させていくことが大切にされていました。

② フィールドワーク

フィールドワークはHRごとに施設の周りに指定さ



令和6年度スタディセンター集合写真

れた場所ごとのアクティビティを行いました。フィールドワークはHRメンバーとの協力がとても重要なのでより仲が深まるきっかけにもなりました。

③ 自主研修について

毎日就寝前に行う自主研修では主に自分がボランティアサービス(以下、VS)を企画したり、誰かが企画したVSに参加したりする時間です。ここでのVSはみんなのためにできることを考え、活動を企画することです。私は3日間の自主研修で次の4つのVSに参加しました。

A ロシアのウクライナ侵攻についての動画を視聴

参加者たちで班を作り、動画の感想や意見を述べ合いました。

B 手話教室

C 人道支援

30分間、あいさつなどの日常で使える手話と、自己紹介の手話を学びました。

障害物のある部屋で目隠しをして先頭の指示役に従いながらゴールを目指す、トレセンのフィールドワークに似た人道支援VSに参加しました。

D 避難所運営ゲーム

ここでは災害時の避難所を運営する手順、掲示板、被災者に寄り添うことなどを学びました。また終わったあとは他のチームと違う点を探して意見を交換しあったりして色々なことを学びました。これ以外にも悩みを聞き合うVSや救急法を看護師の方に直接指導してもらったVS等さまざまなものがありました。

④「今後の活動を考える」時間

自分が考える問題や課題を見つけ、それが本当に誰かのニーズになっているのかを考えながら解決案を企画する時間で、ほぼ1日を費やしました。私は瀬戸内海、海ごみの解決案を作成しました。最後にHRで発表し1人ずつから感想やアドバイスをもらいブラッシュアップしていきました。

まとめ

このスタセンでは自分自身苦しい、辛い、苦手と思う方を選択したので、その結果はむしろ楽しんだという思いで一杯です。このような選択は自分を成長させるために一番大事なことでと気づきました。また積極性を常に持つことを意識して、誰かに言われたからや誰もやらなかったからではなく自分で考えて行動し、責任を伴うことで経験がより深く身につき、成長の土台となったと思います。

自分で行動するためには先見が必ず必要となりました。指示のないスタセンでは自分への命令者は自分、物事を予測しながら動くことが求められ、これは赤字の態度目標である「気付き、考え、実行する」そのものでした。スタセンでは指示命令はありませんが、至るところにヒントが散りばめられているので、気づく感性を5日間で養いました。

最後に楽しむことは楽なことではなく、たくさん苦しくて、恥をかくことを恐れないことも大切だと気づきました。そしてそれを乗り越えたゆえに、スタセンはとても楽しかったの一語に尽きます。

2 奉仕団活動報告

広島県アマチュア無線赤十字奉仕団の活動報告

委員長 田邊圭則

我々広島県アマチュア無線赤十字奉仕団は、赤十字精神に基づき、県民の安全のためアマチュア無線を通じて災害時等における奉仕活動を行うとともに、技術の維持・向上、団員相互の親睦を図ることを目的に、日々研鑽しています。

①「大阪・関西万博」における赤十字パビリオンの運営スタッフ

この度募集がありましたので「大阪・関西万博」における赤十字パビリオンの運営スタッフとして、希望して2名が5月に各5日間就業してきました。

ゾーン1「世界の人々の何気ない日常を垣間見る」・「4分間の映像インスタレーション」・

ゾーン2「世界の人道危機と支援の現状を知る」・「半球型ドームシアター」での9分間の映像を受けて、ゾーン3「誰かのために、行動する」へと、日々巡回して来館者の支援を行いました。



赤十字パビリオン入り口

私は希望してゾーン3を4日間担当し、最初ゾーン3の概要説明の後に、赤十字活動紹介ウォールに興味を持たれた方には積極的に話しかけを行いました。また、東日本大震災の時に命の最後の砦としての象徴である、ボロボロに破れた石巻赤十字病院の赤十字旗については、撮影をお勧めして、記憶の持ち帰りと土産話をお願いしました。ほとんどの方にはタブレットによるメッセージの記入をいただいたが、ゾーン2の印象で心に思い込みが溢れて記入できない方には静かに見守ることもありました。メッセージウォールに表示

されたメッセージについて、積極的にハートラちゃんとの一緒に記念撮影を案内して、お手伝いをしました。就業時間外には、多くのパビリオンの観覧を行い、イタリア館やアメリカ館等で、腰の痛みを我慢しながら、敢えて2・3時間の行列も体験するなど、貴重な体験をさせていただきました。

② 広島県赤十字大会分科会に参加

広島県アマチュア無線赤十字奉仕団の紹介パネルをホールの入口の壁に展示していただいて、参加者にPRしました。なお、今回も時間と場所的な制約のために、委員長の手伝い活動報告の冒頭で、多少無線従事者免許状の取得の話はできたものの、アマチュア無線の体験交信が出来なかったのは、残念でした。

3 分科会

(1) 中学校・赤十字奉仕団合同分科会報告

「気候変動について考え、未来の広島を守るアクション」

広島県青少年赤十字賛助奉仕団委員長

山中章敬



中学校・赤十字奉仕団合同分科会において、「気候変動について考え、未来の広島を守るアクション」と題した研修を行いました。

ました。本研修は、地球規模で進む気候変動が私たちの住む広島県にどのような影響を及ぼしているのか、その実情を深く理解することを目的としました。また、青少年赤十字の実践目標である「健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」に基づき、災害への備え（適応策）と、気候変動そのものの抑制（緩和策）の両面から、

参加者一人ひとりが主体的に考え、行動へ移す力を育むことを目指しました。

【身近な「広島の問題」として考える】

研修の前半では、気候変動の影響を可視化した映像を視聴しました。気温上昇によるカキのへい死といった身近な産業への被害や、熱中症・感染症の増加、激甚化する豪雨災害などの現実を目の当たりにし、参加者は「自分たちの問題」として課題意識を共有しました。この問題意識を踏まえ、温室効果ガス削減に向けた具体的な緩和策について意見を交わしました。後半は、「気候正義」をテーマにした講義を通じて、青少年赤十字の活動と「適応策・緩和策」のつながりを再確認しました。その後、グループごとに具体的なアクションプランを話し合い、ワークシートにまとめて発表を行いました。



気候変動の影響について説明

約90分という限られた時間でしたが、参加者は真摯に課題と向き合い、気候変動のメカニズムから具体的

な対策まで、多角的な視点で学びを深めていました。この研修をきっかけに、参加者が気候変動をより身近な課題として捉え、それぞれの学校や地域での活動の中で、仲間とともに「未来の広島を守るアクション」を広げていくことを期待しています。

(2) 高等学校分科会報告

広島県高等学校総合文化祭 JRC ボランティア部門大会・救急法競技会

JRC・ボランティア専門部委員長

広島市立みらい創生高校 濱本貴司

昨年度から、「青少年赤十字広島県大会」が「広島県赤十字大会」となり、今年度もJRCメンバーと各奉仕団との交流を深める場となった。全国総合文化祭（全国総文）出場校の予選会として、「2016ひろしま総文」以降、広島県高等学校総合文化祭JRC・ボランティア部門大会を、JRC活動の振興を目的とした県大会と併設する形で継続して開催してきた。今年で9回目となる今大会も、前半の活動報告部門と、後半の分科会を「救急法競技大会」Ⅱ救急法部門とする2本立てで行った。

活動報告部門では3校が各校の特徴的な取り組みを発表し、分科会を使つての「救急法競技大会」では、日赤の救急法指導員3名の方から丁寧な指導を受けてから競技会に移ることで、大変充実したものとなった。特に「救急法競技大会」は広島県における継続的な取組として定着してきており、夏に行われるトレセンで学んだ知識と技能を各学校で県大会に向けて練習する

サイクルにより、また、毎年行われることで先輩から後輩へと受け継ぐことにより、年々レベルが向上している。JRC活動に取り組む学校や生徒にとって、まさに赤十字の理念に基づき、すばらしい取り組みになっていると考える。



救急法（包帯法）競技大会

このような大会を進めるにあたり、トレセンでの指導や、当日の審査・指導に当たっていただいている賛助奉仕団や日赤広島県支部の皆様には感謝するとともに、今後はより多くの高校等がこの取組に関心を持ち、参加してもらえるよう輪を広げていきたい。

【参加生徒の感想】

「今まで積み重ねてきた活動が評価され、今回認めもらうことができました。また、みんなで協力して取り組んできた日々の努力が形になり、大きな励みにもなりました。これからも、今までの経験を活かしながら地域に貢献できるボランティア活動が続けていき、より多くの人に活動の魅力を伝えられるよう工夫していきたいです。」（広島なぎさ高校ボランティア部長）

「包帯法は練習時間が少なかったですが、その中でもメンバーが一生懸命に頑張ってくれたおかげで良い結果を得ることができました。チームで協力して取り組みめたことがとてもうれしかったです。機会があればまた参加したいと思います。」（広島みらい創生高校ボランティア部）

【第9回（令和7年度）大会結果】

★総合部門

最優秀校

- 広島市立広島みらい創生高等学校 ボランティア部
- 第2位 広島なぎさ高等学校 ボランティア部
- 第3位 広島市立舟入高等学校 JRC部

★活動報告部門

最優秀校 広島なぎさ高等学校 ボランティア部

- 第2位 広島市立舟入高等学校 JRC部
- 第3位 広島市立広島みらい創生高等学校
ボランティア部

★救急法部門

最優秀チーム

- 広島市立広島みらい創生高等学校 Dチーム
- 優秀チーム（傷病者対応）
広島市立広島みらい創生高等学校 Cチーム
- 優秀チーム（チームワーク）
広島市立舟入高等学校 Bチーム

参加校… 舟入・広島みらい創生・広島なぎさ（見学参加のみ）・比治山女子（見学参加のみ） 4校18名が参加

（実践発表）

「優しさ」を集める

保育所まこと学園園長 東岸和子



夏の日の朝の会で私はこんな話をしました。

「暑くなってきたのでペットボトルの飲み物をたくさん飲むようになったんだけど、あのペットボトルのキャップを集めると外国のお友達が病気にならないようなお薬を送ることができると。先生は、そんなことができるって知らなかったの、外国のお友達のためにならなら、ペットボトルのキャップを集めようと思いました。優しさを集めて送ることができるかなと思って・・・」

次の日、園長室のドアがノックされ、年長さんのA子さんが立っていました。すつと手に持っていた袋を差し出しました。それは、ペットボトルのキャップでした。A子「おうちにあったから持ってきました。園長先生のと一緒に集めてください。優しさを集めるんですよ。」

私は、驚きました。子どもたちには話しましたが、保育園の活動としてすることは考えていませんでした。私は、お話をよく聞いてすぐに実行に移してくれたことが嬉しくて、お礼の手紙を書きました。「優しさをありがとう」と。その次の日から、次々に子どもたちが私のところに「優しさ」を届けてくれるようになりました。

それがきっかけで保育園のみんなでペットボトルキャップを集めることになりました。集めるための大きな箱を年少さんや年中さんと一緒に工夫して作ってくれました。

今、箱は3個あります。どの箱にも子どもたちの「優しさ」がたくさん集まっています。



集まったペットボトルキャップと園児たち

令和7年度高校トレセンについて

賛助奉仕団 顧問 日高敬司

トレセンはコロナ禍間は中止され、その後、宿泊なしの状態が続きましたが、今年度高校で二泊三日、小学校で一泊二日、中学校は泊なし二日で実施しました。高校は宿泊があるので時間的余裕が生まれ、新しい試みを挿入しました。

1 「リーダーシップ」のアクティビティ

(1) 導入の経緯と目的

従来、リーダーシップに関する教育は講義形式を中心としてきました。しかし、児童・生徒は、小学校での集団登校における班長、学級委員、あるいは中学校での部活動といった活動を通じて、日常的にリーダーとしての役割を経験しています。そこで、既成の理論を一方的に伝達するのではなく、生徒自身がこれまでの経験を振り返り、自らの考えを言語化・共有する対話型のアクティビティの形式にしました。

(2) 活動のコンセプト

本活動では、リーダーシップを「特定の個人に備わる資質」としてではなく、「チームの中で必要に応じて育まれるもの」と定義しました。そのため、具体的なテーマとして「チームワークの実践」を掲げ、協働作業を通じてリーダーの役割を再考する構成としています。

(3) アクティビティの実施手順 (KJ法を利用)

1 チーム最大6名の計3チームを編成し、KJ法の方法で実施しました。

2 避難所運営ゲーム (HUG)

避難所運営ゲームは、元は静岡県が開発した避難所運営を疑似体験できるシミュレーションゲームです。これを広島県用に開発し、今回は使用できるかの確かめになりました。使用できる用途がたちましたので、静岡県に申請しました。

ゲームの内容

プレイヤーは避難所の運営責任者となり、次々と押

し寄せる避難者への対応をカードを使ってリアルタイムに判断していきます。

避難者カードには、年齢、性別、国籍に加え、「持病がある」「ペットを連れてくる」といった個別の事情が記されています。これらを体育館や教室などの図面に適切に割り振る一方、炊き出しの設置や仮設トイレの設置、マスコミ対応といった突発的な出来事(イベントカード)にも同時並行で対処しなければなりません。

このゲームの目的は、混乱する現場で「いかに迅速かつ適切に判断を下すか」という難しさを体験し、防災意識を高めることにあります。正解が一つではない課題に対し、参加者同士で話し合うことで、多様な視点を持った避難所運営のノウハウを学ぶことができます。

3 会議運営のための「ファシリテーション」

日程プログラムの中に参加者たちで話し合いをする時間を設けたいという要望があったので、会議運営の一つとしてファシリテーションの手法をレクチャーしました。

ファシリテーションとファシリテーターについて

会議や話し合いの場で、参加者の発言を促し、意見を上手にまとめて合意形成へと導く手法を「ファシリテーション」と呼びます。直訳すると「物事を容易にする」「促進する」という意味があります。

この役割を担う進行役が「ファシリテーター」です。ファシリテーターは、自ら意見を出して会議を引っ張る「リーダー」とは異なり、あくまで中立的な立場で「場を整える」ことに徹します。

具体的には、発言しやすい雰囲気を作り、対立する

意見があればその背景を整理して、全員が納得できる結論を見出す手助けをします。一人ひとりの知恵を引き出し、チーム全体の力を最大限に発揮させるためのこの技術は、学校教育や地域活動、そしてビジネスの現場においても、今最も必要とされているスキルの一つです

4 「ワークショップ」の新しい試み

現在実施しているワークショップは、本トレーニング・センタ―（以下、トレセン）で得た学びを、参加者がそれぞれのフィールド（学校や地域）でいかに活用するかを構想し、その成果を論理的にアウトプットすることを目的としています。近年の大学入試において小論文が重視されている傾向にあること、社会人になり新しい考えを提案するなど、自身の考えを論理的に構築し、発信する力を養う準備段階としての役割も担っています。そこで、論理的思考の基本をレクチャ―し、記入形式を提示して、各自で考え、最後に発表していただきました。

① 考え方の順

① 問題提起（ニーズ）（気になっていることを挙げてみる）

② 現状把握（いま、どうなっているか）

③ 原因追及（なぜ、このようなことが起こっているのか）

④ ビジョン（結論）（だから、こうする）

⑤ 具体案（人、物、お金を考えて）

⑥ 評価基準（何ができたら成功といえるか）

⑦ 目的（哲学）（何のためにするのか）

② 発表順（他人に論理的に説明する）

① 目的（哲学）

② 結論

③ 問題提起

④ 現状

⑤ 理由（原因）

⑥ 具体案

⑦ 評価基準

さて、日本赤十字社本社のスタセンにおいては、すでに「ワークショップ」という用語は使用されず、「今後の活動を考える」という呼称に統一されています。本来、研修の形態には「講義形式」と、参加者が主体的に行動する「演習形式」の二種類があり、近年では後者が一般的に「ワークショップ」と呼称されています。したがって、トレセンでは「今後の行動を考える時間」のようにする必要があります。

令和7年度中国・四国ブロック青少年赤十字賛助奉仕団連絡協議会・研修会（高知大会）

幹事長 寺田 宣文



はじめに

11月13・14日に、みだしの連絡協議会・研修会が高知県で開催さ

れ、中四国9県から青少年赤十字賛助奉仕団20名、講師・来賓・オブザーバー・日赤高知県支部などあわせて30名が集いました。広島県からは山中委員長、日高顧問、寺田幹事長3名が参加しました。

高知県賛助奉仕団や支部のみなさんには大変お世話になり、2日間を通じて、青少年赤十字活動の発展の

ため賛助奉仕団の果たすべき役割について、新たな思いを9県で共有する内容でありました。

第1日

第1部 講演「ジョン万次郎とその時代」

講師 土佐史談会事務局長 青野 博

青野博氏は何度もアメリカを訪問され、ジョン万次郎の真実の姿を「伝説・物語化された万次郎像」と、実際の史実とのギャップ（誤解や脚色された部分）を解明する内容をテーマにしておられます。青野氏のライフワークとしてのジョン万次郎研究は実に素晴らしいものです。お話に深く感動しました。

高知県の郷土史誌である「土佐史談」は、現在第291号だそうです。かつて「中浜万次郎（ジョン万次郎）」が特集として取り上げられ、そこに青野博氏執筆の論考「ジョン万次郎と仲間たち」が掲載されています。万次郎とその周囲の人物（漂流仲間、支援者など）を中心に、万次郎の人間関係・社会的影響を分析されています。

講演内容を紹介します。

漂流と救助の実相

天保12年（1841年）に土佐・中浜から出漁中に遭難し、鳥島に漂着、アメリカの捕鯨船に救助されるという万次郎の基本ストーリー。

アメリカでの生活と学び

救助後、万次郎はホイットフィールド船長に引き取られ、米国で英語、測量、航海術、造船などを学ぶ。帰国とその後の活躍

万次郎は帰国後、土佐藩士・通訳・外交役として活躍。特に幕末の開国・国際交流の時代における重要な役割。

思想・メッセージ

青野氏が「真実」と題した講演をしていることから、単なる漂流記だけでなく、万次郎の経験が当時の日本（鎖国、国禁、国際関係）にどう影響を与えたか、彼のメッセージや思想（例えば、異文化理解や開明性）を掘り下げている可能性が高い。

仲間関係・協力者

論考タイトルに「仲間たち」とあるように、漂流した仲間や彼を支えた人物、また帰国後関係を築いた藩・人物（たとえば河田小龍など）との関係性も詳しく論じられていると考えられる。

郷土史的視点

青野氏が土佐史談会の研究者・理事という立場から、万次郎を「土佐（高知）」の歴史・文化の文脈で語っている。つまり、万次郎個人のドラマだけでなく、彼の出身地（中浜／土佐清水など）の社会風土、漁村の事情や藩の対応なども交えた話をしている可能性が高い。

第2部 各県の取組についての発表と意見交換

広島県の発表は、立ち上げた私たちのホームページを放映して、防災教育資料の内容、広島県で赤十字活動に携わった明治以降の偉人などを紹介しました。特に防災教育資料の活用は他県でも十分活用していたいただける内容ですので、しっかりPRさせていただきました。

第2日

加盟校実践発表「香美市立片地小学校訪問」

高知市内から東に20km移動し、香美市立片地小学校を訪ねました。教頭先生から学校紹介をしていただきました。児童数は約57名、教職員15名の小規模校で、

令和4年度から「小規模特認校（特認校）」制度を利用し、他市町からの児童の入学者を受け入れています。地域との強い結びつきが長く、特に隣接する高知県立高知工科大学と様々な連携を取り入れてユニークな活動をしている学校です。

校内に所狭しと掲示されている数々の掲示物を見るだけでも飽きることがありませんし、児童と学校の活動がよくわかる素晴らしい内容です。先生と児童が担当を決めて協働で作っているとのことでした。

また、地域・学校協働活動が盛んです。地域ボランティアとの連携で、学校が地域住民、保護者、企業などと連携し、子どもたちを支援する活動をおこなっています。「やまびこ会」による登下校の見守りや「片地読み聞かせの会」による読み聞かせ活動などです。高知工科大学の教授等による授業や大学生が毎週2回ボランティアで来てくれるそうです。また、大学図書館の本を借りたり、大学構内を巡ったり、植物観察なども行われています。PTA主導では、田植え、稲刈り、災害訓練、ふれあい行事など、活動が実に多彩です。

参観授業は、5年生の「防災への取組み」でした。前提として児童たちは、実際には避難所生活の経験はありませんが、体育館を使って模擬避難所を作り、生活体験をしています。授業では、避難所運営を小学生なりに考えることで、その困難さや配慮すべきことを考えるものでした。児童は一生懸命考えアイデアを出し合っていました。私の郷里でおこなわれている自治会単位や小学校区単位の防災学習では、大人の活動にとどまっています。子どもたちの参加まで推し進めている片地小学校の防災学習ははるかに先行している

思いました。

その後、3年生ガイドによる校内洞窟めぐりを体験しました。これは香美市にある鍾乳洞「龍河洞」を3年生が校内の空き教室に作って訪問者に説明して巡るようにしたものです。私たち訪問者4名を二人で精いっぱい案内してくれました。

片地小学校を後にした私たちは、やなせたかし氏が小さい時を過ごしたここ香美市にある「香美市立やなせたかし記念館（アンパンマンミュージアム）」を見学しました。

この2日間の研修は、中国四国9県の青少年赤十字賛助奉仕団の活動が団員の高齢化や新入団員確保の難しさだけでなく、各県内の加盟校拡大がなかなか進まないことなど、今抱えている活動の悩みを参加者で共有できました。次回の開催県・島根県での開催までの1年間、活動をしつかり前進させなければなりません。あらためて、中国・四国9県のこの研修会の重要性を感じました。

（賛助奉仕団員の随想）

JRCに出会い50年を越えました

（その五）

生徒会役員をJRCに引き込んで

賛助奉仕団副委員長 野田 崇

1960（昭和35）年代は高校生急増期に新設校が急増し、十年経て1970年代は、工業高校生徒の多様化や学習意欲の減退が始まり、それが休退学増加に直結していました。とことん話し合っても「先生、もうえーわ」と退学する生徒に無力感を持ちました。

この社会情勢にあつて、勤務するM工業高校（以下、M工高）JRCクラブ（同好会）加入者が少人数になり、活動の維持が困難な状況が生まれました。校務分掌が生徒会係だったので、役員改選後の早い時期に、金・土・日の2泊3日の合宿で生徒会役員とM工高の現状と課題を議論して学校課題解決に向かう方法を議論しました。

議論は、KJ法を利用しながら、現状把握↓原因追及↓構想計画↓実施計画とステップを踏みながらM工高の現状を明らかにしていきましました。「生徒の学習意欲が乏しいのは、学校教育の中で取り残された」、「先生は出来る生徒だけを相手にして授業をしていた」、「わからないと質問しても、丁寧に対応してくれなかった」など学校教育への不満が明らかになりました。

学習意欲の現状は「生徒だけの責任ではない」自立した社会人として、人格の完成を目標とする教育基本法の理念から乖離した教育体制が、学習意欲を減退させていました。であつても生徒会役員は、「わたし達だけで解決できないが、生徒会が出来ることを一生懸命やろう」と決意しました。

この取組みの中でJRCの説明をして他校生との交流を通して内実を高めることを提案したところ、前向きになりJRC高校生交流会に積極的に参加してくれるようになりました。

交流会での多様なふれあいやトレセン参加の中で赤十字を学び、経験と知識を充実させていきました。

「学校をキレイにしよう」「サボらないで授業を受けよう」「単位を取って卒業しよう」とスローガンを掲げ、生徒会活動を活性化していきました。

生徒会係としての3年間の取組みで生徒の活性化に

直結しませんでした。生徒会役員の取組みは、生徒間に理解されたと思つています。この間の生徒会役員の中には、高校教員になり校長や教頭になっている卒業生がいます。

M工高を再任用で退職して17年になります。地域に出かけ工業高校の特質を生かして主体的にイベントに参加する生徒たちを見聞すると、生徒会活動が活性化しているなど実感しています。そして、生き生きと活動する生徒たちを温かく見まもる地域の「よくやつてくれます」の評価がありました。

「人道」がより求められる今こそ青少年赤十字活動を活かす

青少年赤十字賛助奉仕団副委員長
青少年赤十字指導者協議会 顧問

三浦義之



私がかつて勤務していた学校は青少年赤十字に加盟していた。そこで初めて青少年赤十字の活動に触れ、退職後も賛助奉仕団に微力ながら、参加させてもらっている。

学校で学んだ青少年赤十字の態度目標である「気づき 考え 実行する」は、学級での生徒への日々の語りや生徒自身の振り返りの中にも活かされ、生徒一人ひとりの成長だけでなく、生徒同士のつながりを生むことも実感した。さらに、校内研修で指導を受けた人

道の4つの敵という言葉、「利己心」「無関心」「認識不足」「想像力の欠如」も生徒会活動での生徒の思考や自主的・主体的な活動の質を向上させる点で非常に役立っていた。このように教育活動の場面で、目の前の課題を深く探究する姿勢や困っている人を放っておかないという自発的行動など、学校教育全般で生徒の人間の成長に青少年赤十字の理念は大いに活かされていた。

しかしながら、現在、青少年赤十字加盟校の中には活動の中心を担う職員の異動や学校を取り巻く教育環境の変化の中で青少年赤十字活動の理念や実践が共有されず、生徒の自主性・主体性を育むための取組であるはずの活動が形骸化している現状があると聞く。

また、ポストコロナ以降、文部科学省の実態調査では子どもの深刻な状況が報告されている。2024年度には、小・中・高校生の自殺者数、小中の不登校者数、小・中・高等学校及び特別支援学校におけるいじめの認知件数、小・中・高等学校における暴力行為件数いずれも増加傾向で過去最多を示している。また、精神疾患で休職した教職員が2年連続7000人超えとなるなど学校現場も厳しさを増している。

他者とのつながりが絶たれたコロナ禍を経て、今、学校では行事や活動が再開されている。しかし、その学校で行事の度に子ども同士のトラブルが絶えないとの声が上がっている。目の前の子どもたちの課題に向き合い、子ども同士のつながりをつくる手立てとして、今こそ青少年赤十字の活動を活かす時ではないか。決して、本来の教育の上に屋上屋を重ねるものではなく、青少年赤十字の手立てを活用ということであり、ただ、今までやらなかったことをするわけだから、多少の苦

労はあるが少なくとも学校本来の役割である人間づくりに寄与するものであり、そこは熱意の問題である。これまでも生徒の成長をひたむきに願い、取り組む教職員を支える実践に青少年赤十字は活用されてきた。今、改めて人道の想いを掲げる青少年赤十字活動を現場の先生方に知っていただくこと、そして、理念と実践をお伝えしていくことが我々賛助奉仕団に求められていると感じている。

共にによりよく生きる社会をめざして

庄原市立西城保育所長

・賛助奉仕団幹事

原田樹雄



JRCとの出会いは、今から38年前、比和町立三河内小学校(現・庄原市立比和小学校へ統合)に勤務した時に遡ります。当時、田

舎の家庭の多くは、玄關脇に日本赤十字社員証を掲示しており、私の実家も例外ではありませんでした。

しかし「JRC」という言葉は初めて耳にするもので、どのような活動をするのか全く見当もつきませんでした。初めての小学校勤務、そして高学年の担任。赴任と同時に、JRC登録式、山と島の交流会(鹿島小学校、現・呉市立倉橋東小へ統合)、トレセンへの参加など、校長先生をはじめ先輩方に相談しながら夢中で活動を展開した日々が、つい昨日のことのように思い出されます。JRCの態度目標「気づき・考え・実行する」は、その後の私の教育活動の基盤となりました。その後、JRC加盟校での勤務がない時期も、学級・

学校づくりの土台としてこの言葉を子どもたちと共有し、常に自他に問いかけ続けてきました。

現在、保育・教育の現場では「主体性」を重んじ、自己決定の場を確保することで個の伸長を図ることが重視されています。これはまさにJRCの態度目標そのものです。教育活動と密接に連携しながらJRC活動を育んできた私にとって、それは当然の帰結でもありました。

令和2年4月からは、公設民営となった庄原市立西城保育所を預かる身となりました。園歌に歌われている「おひさま」を目標に、「笑顔であいさつ 元気な歌声 おひさまの子」を合言葉として日々の保育の充実に努めています。保育指針においても小学校学習指導要領との接続が明確に示されており、遊びや生活を通して「道徳性の芽生え」や社会事象への関心を育み、小学校以降の学習の基礎を培うことが求められています。

日々の活動では、意図的に整えられた環境の下、子どもたちが「気づき」、解決や創造のために「考え」、「実行する」というプロセスがスパイラル(螺旋)的に繰り返されるよう、個々の育ちに応じた関わりを大切にしています。目指す到達点は、子どもたちの「自立(自律)」した姿です。そのために「気づき・考え・実行する」という思考過程は不可欠であり、昨今よく用いられる「PDCAサイクル」も、本質はこのJRCの態度目標と同じであると改めて実感しています。

当園では、行事においてもこのプロセスを大切にしています。「おひさま運動会」や「おひさま発表会」などの際、子どもたちに「お家の人に何を見てほしい?」「どうすればみんなが楽しめるかな?」と問いかけ、

子どもの中から生まれたアイデアを活動の柱としています。こうした積み重ねがあるからこそ、子どもたちは小学校入学時に「ゼロ」からのスタートにはならないのです。

今年度、象徴的な出来事がありました。連携校である西城小学校の運動会で、1年生の担任が「ダンシング玉入れ(曲に合わせて踊り、止まったら玉入れをする競技)」を提案した際、子どもたちが「保育所でやっただ!」と反応したのです。それは「既知だからつまらない」という反応ではなく、「経験があるから自信を持って取り組める」という前向きな姿でした。彼らは過去の経験をもとに自ら考え、1年生としての目標に沿った、より高度な内容へと競技を進化させることができました。まさにJRCの態度目標がスパイラルに深化した姿といえるでしょう。



私たちの生活は、まさに「気づき」「考え」「実行する」ことの繰り返しです。この積み重ねを通して自己実現を図り、誰もがよりよく生きる社会を築いていく。私自身、今一度その原点であるJRCの理念に立ち返り、共にによりよく生きていく姿を追い求めていきたいと考えています。

令和7年度青少年赤十字賛助奉仕団活動報告

幹事長 寺田 宣文

(会場名のないものは日赤広島支部)

4月15日 役員会

5月20日 令和7年度総会

青少年赤十字指導者協議会総会・研修会

6月23日 広島県赤十字奉仕団委員長会議

7月5日 青少年赤十字指導者研修会

(指導者トレセン)

7月7・8・9日

全国賛助奉仕団協議会役員会・総会(山中)

7月31日～8月2日(2泊3日)

高校トレセン (スタッフ・日高)

(会場、小・高いずれも、グリーンヒル郷原)

8月1・2日(1泊2日)

小学校トレセン

8月7・8日(泊なし)

中学校トレセン(スタッフ・山中、岩見)

(会場、日赤県支部)

8月27日 役員会

9月30日 役員会

10月25日 広島県赤十字大会(山中・日高・寺田)

中学校・奉仕団分科会で防災講座担当(山中)

11月13・14日

中国・四国ブロック青少年赤十字賛助奉仕団連絡

協議会・研修会(高知市・香美市)

(山中・日高・寺田)

11月25日 役員会・機関誌編集会議

12月16日 役員会・機関誌編集会議

1月13日 役員会・機関誌編集会議
2月17日 呉市立片山中学校 いとすぎ植樹
2月24日 役員会・機関誌編集会議
3月24日 役員会・機関誌送付作業

青少年赤十字登録式への参加

・海田西中学校 山中(賛助)、三ヶ尻(支部)
・海田中学校 山中(賛助)、三ヶ尻(支部)
・府中中学校 山中(賛助)
宇都宮、三ヶ尻(支部)

・保育所まこと学園 三ヶ尻(支部)
・保育所ひかり学園 宇都宮、三ヶ尻(支部)
・くまの中央保育園 宇都宮、三ヶ尻(支部)

令和6年度青少年赤十字加盟状況

令和6年度青少年赤十字加盟状況

校種	全国		広島	
	校数	加盟率	校数	加盟率
幼稚園	590		4	
保育園	603		11	
(認定こども園)	585		3	
小学校	6,956	37.0%	74	16.2%
中学校	3,441	34.8%	71	27.3%
高校	1,732	36.3%	34	27.0%
特別支援学校	234	19.6%	2	10.5%
義務教育学校	97	40.8%	2	25.0%
中等教育学校	14	23.7%	1	100.0%

(加盟校数は、本社「令和6年度青少年赤十字概況」から転載)

令和7年度青少年赤十字賛助奉仕団役員

委員長 山中 章敬

副委員長 野田 崇、(兼) 寺田 宣文

幹事長 三浦 義之

幹事 寺田 宣文

会計幹事 下野 玲子

幹事 河野 和夫、原田 樹雄

監事 田中 誓一、吉丸 朝美

顧問 河戸 靖子、田中 博

日高 敬司、水野 善親

(青少年赤十字賛助奉仕団は、JRC活動を応援するために設けられたもので、元JRC指導者や趣旨に賛同する人々の団体です)

編集委員

下野 玲子、寺田 宣文、野田 崇、日高 敬司、

山中 章敬

編集後記

実践発表は主として昨年に引き続き「広島県赤十字大会」で発表していただいたところから掲載しました。トレセンは念願の宿泊研修が小学校・高校で実施できました。高校ではいくつかの新しい試みをしましたので、掲載しております。

今年度のトップピックはホームページの開設です。googleで「広島県青少年赤十字賛助奉仕団」とすれば、閲覧できます。是非訪れてみてください。

前述の赤十字県大会の高校の部では、例年「救急法競技会」を行っています。できれば、これが県民運動となって全県に広がっていけばと期待しています。